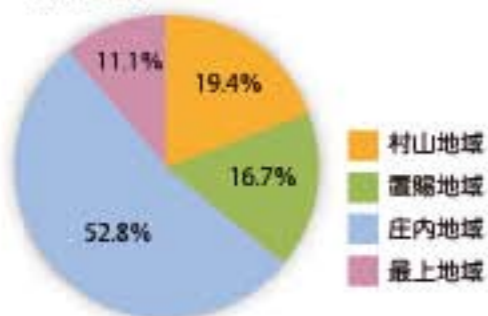


令和3年度 山形県における障がい者芸術文化活動状況のアンケート調査 [調査報告]

調査期間：2021年9月15日(水)～2022年2月28日(月)
 回答数：37件(メール配信300件程度、ウェブサイトにて様式ダウンロード)

山形県内の障がい者芸術文化活動のさらなる充実のために、個人の作家、家族、福祉事業所、支援学校等を対象に芸術文化活動についての実態調査や要望のアンケート調査を実施し、集計、分析を行いました。

質問1 回答者・団体の所在地エリアを教えてください。(36件の回答)



質問2 障がいのある方の芸術文化活動について関心がありますか？(36件の回答)

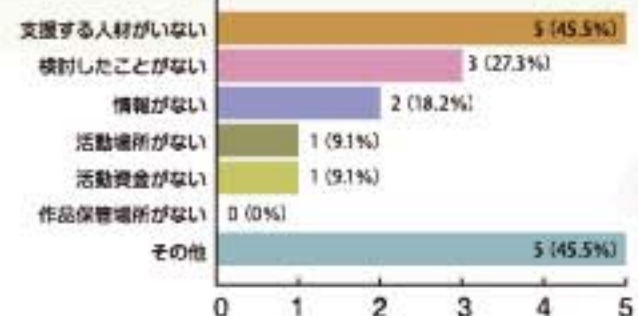


質問3 芸術文化活動を行っていますか？(37件の回答)



関心があるが活動は行っていない実態が見られる。

質問3-1 行っていない理由を教えてください。(複数回答可 11件の回答)



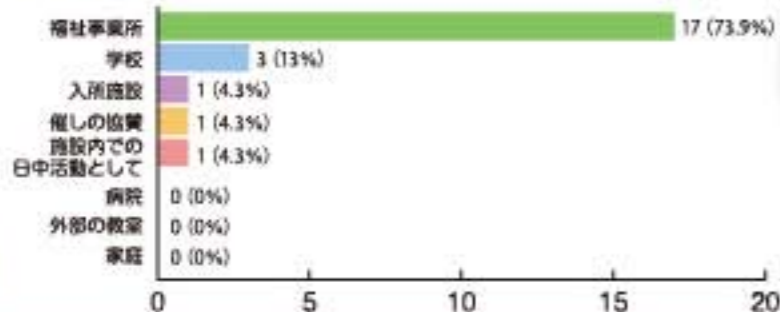
専門的な人材不足が見られる。

※その他
 ・時間の確保が難しい
 ・今後活動していく予定
 ・以前挑戦したが難しかった 他

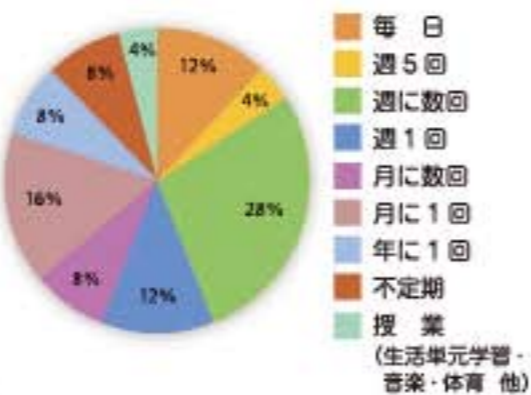
■ 質問3で「はい」と回答した方へ

質問3-2 現在はどのような芸術活動をしていますか？

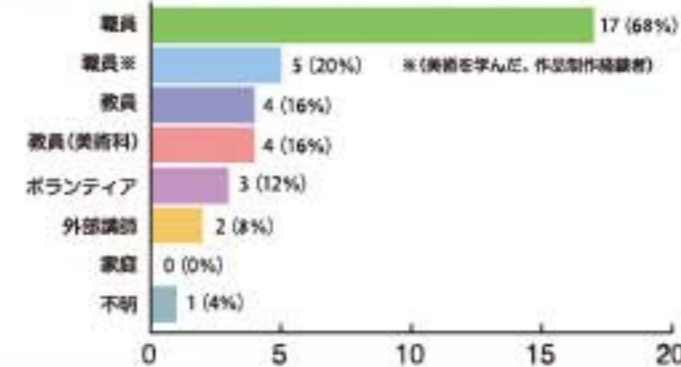
①活動場所 (複数回答可 23件の回答)



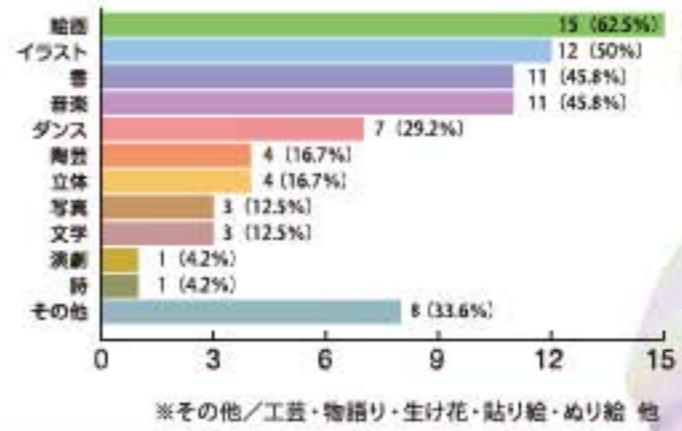
②活動頻度 (25件の回答)



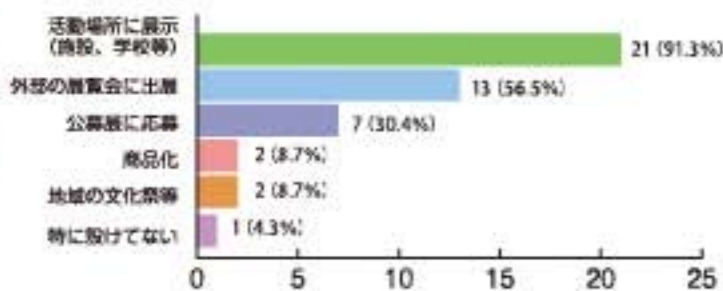
③講師、支援者はいますか？(複数回答可 25件の回答)



④現在の活動内容 (複数回答可 24件の回答)



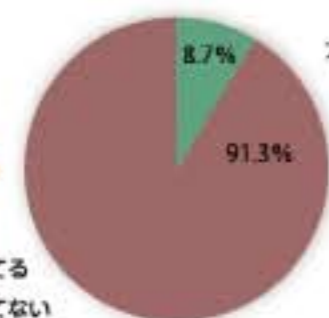
質問4 作品はどのような場で発表していますか？(複数回答可 23件の回答)



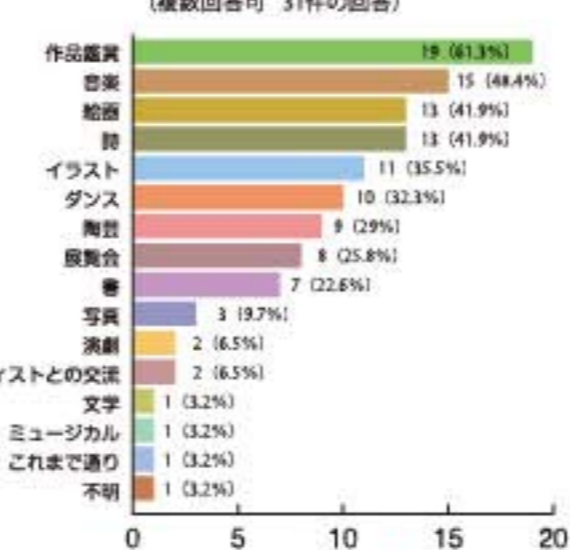
質問5

作品の著作権等の帰属、出展、販売、二次使用等を行う場合の取り扱いを定めていますか？

(23件の回答)

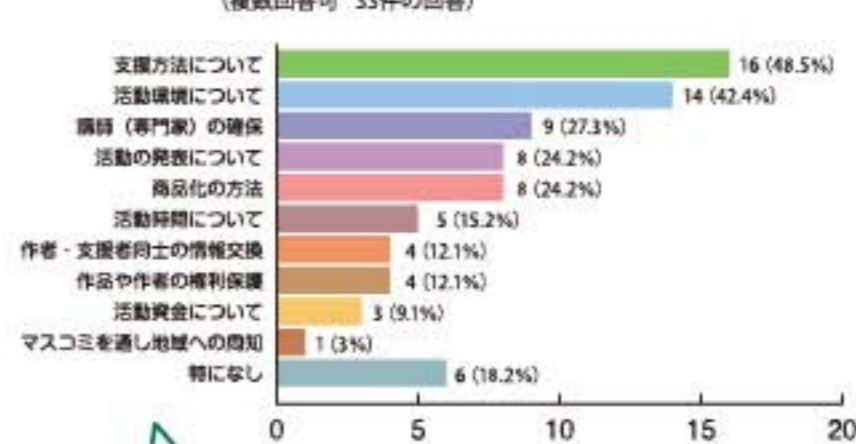


質問6 今後どのような芸術活動を行ってみたいですか？(複数回答可 31件の回答)



「作品鑑賞」のニーズが高い。

質問7 芸術文化活動において、現在の課題や必要としていることがあれば教えてください。(複数回答可 33件の回答)



発表や活躍の機会をつくる意識・関心の高さが見られる一方で、人的・物的環境に関する課題解決が求められている。人材不足への対策は特に検討が必要。

ら・ら・らレポート

今回のアンケートを通して、障がいのある方の芸術文化活動に高い関心が寄せられていることがわかりました。その一方で、関心がある団体でも、人材不足や情報不足が壁となり、活動の実現が難しい実態も見えてきました。また、活動を実施している団体では、美術に関する専門的な人材が不足していました。さらに、課題として「講師(専門家)の確保」を挙げた回答は27.3%でした。これらの点からも、人材育成を目的とする研修や展示実践などのアウトリーチ事業をはじめ、さらなるネットワークの構築支援が必要であることがわかります。芸術文化活動として「作品鑑賞」へのニーズが多いため、県内芸術文化施設におけるアクセシビリティ向上へ向けた働きかけや、対話型鑑賞などにも力を入れていきたいと思っております。

分野を超えてさらに先へ [協働事業]

ら・ら・らでは、山形県内の芸術文化やデザインを専門とする機関と連携し、協働事業を行いました。異分野同士が互いの専門性を活かしながら、どのように対話を深め、共通する目的をもって協力関係を構築できるか。その新しい可能性を見出すための、企画運営やコーディネートも行っています。

こうふくで

工業×福祉×デザインが連携して、“はたらく”と“いきる”をそれぞれの視点で共有することにより、ここ山形で、みんなが幸せでいられることをデザインするプロジェクト。ものづくりを通してその実現を目指していく取り組みです。

山形県産業労働部工業戦略技術振興課（現：産業技術イノベーション課）／山形県工業技術センターとの協働事業である「工業・福祉・デザイン連携プロジェクト-こうふくで山形-」が本格始動しました。ものづくり企業、福祉事業所、デザイナーの連携による、商品開発の補助事業において、分野を超えた連携のためのコーディネートを行いました。連携における課題も確認しつつ、関係者同士の対話を重ねながら、協働方法を模索中です。

また、オンラインでミーティングを2回実施し、県内外の取り組みを共有したりディスカッションを行い、分野を超えた情報交換やネットワークづくりの機会をつくりました。ただ都市部の偏見に寄せるのではなく、山形らしい幸せのあり方を考えて提案する取り組みとしての発信に、可能性を感じています。

工業・福祉・デザイン連携プロジェクト「こうふくで山形」

こうふくで ミーティング

こうふくでミーティング Vol.1

開催日：2021年8月25日（水）
参加者：41名
工業、福祉、デザイン分野が互いのことを知る目的で、各施設を訪問した動画を共有。

こうふくでミーティング Vol.2

開催日：2022年3月17日（木）
参加者：30名
助成事業採択2団体2事例と、その他の山形県内の工業、福祉、デザインの連携で生まれている4事例を紹介し対話を行う。



福祉と芸術文化のかけ橋

[ぎやらりーら・ら・ら]

社会福祉法人愛泉会では、2011年に障がいのある方の作品を展示する場「ぎやらりーら・ら・ら」を開設し、障がいのある方の芸術活動の発信と人材交流の場

として、福祉と芸術文化のかけ橋になるよう、ギャラリーを地域に開いていく活動を行っています。

企画展や、トークイベント、ワークショップ、オープンアトリエなども年間通して開催しています。また、各種相談はこちらからも受け付けています。



GALLERY LAJAJAJA

ぎやらりーら・ら・ら/ やまがたアートサポートセンターら・ら・ら

〒990-0033 山形県山形市露崎町一丁目2番7号
tel.023-674-8628

ホームページアドレス / <https://www.y-aisenka.com/info/lajala/>
YouTube公式チャンネル / <https://www.youtube.com/channel/UC...>



オープンアトリエ「アトリエら・ら・ら」

福祉事業所の活動以外で、継続して表現を深めてみたい人や、個人的に表現活動を行っている人が集い、創作する場として月に1回、最終土曜日に開催しています。

絵を描いたり、立体物をつくったり、色を染めたりなど、普段使ったことがない画材や手法などを体験しながら、それぞれに合った表現方法に出会う機会をつくり、表現の可能性を伸ばす支援をしています。また、それぞれの作品を鑑賞して感想を述べあう対話もを行っています。

小学生から60代まで年齢も特性も様々ですが、表現することを軸に出会い、障がいの有無や立場等の枠を超えて、敬意が生まれ、自然に交流する場になっています。

【企画展】「わくわく・ひょうげんの泉」

社会福祉法人愛泉会の表現活動の中で創作された作品を集めて紹介する展覧会です。展示作業は福祉事業所のメンバーとスタッフも一緒に行いました。

【第一部】オープニング企画展 「うずまくひかり・さんさんさん」

会期：2021年5月17日(月)～6月30日(水) 来場者数：230名 出展者数：41名

【第二部】愛泉会作品展 「わくわく・ひょうげんの泉」

会期：2021年7月12日(月)～8月31日(火) 来場者数：136名 出展者数：79名



【企画展】「みえるものの向こう側」
大泉真帆 長谷部康寛 二人展

写真家の長谷部康寛さんが、「やまがた障がい者芸術作品公募展 2020」大賞を受賞した大泉真帆さんの絵画作品に感銘を受けたことから二人の交流は始まりました。2021年1月には、米沢市で開催された「わたしとあなたの作品展」にて共同作品を発表。その後も交換日記をコンセプトにした共同作品を制作するなど、交流を続けてきました。視覚的な身近な世界をイメージへと変換していく長谷部さんの写真作品と、生まれつき全盲の大泉さんが描く点と線、色の重なりリズムを感じるドローイング作品。視覚的な写真から非現実へと向かう表現と、視覚に頼らずうちなる視覚で訴えかけていく表現。作品を見る人たちがさまざまな感覚を使って「みえるものの向こう側」を感じる展示となりました。

会期：2021年9月27日(月)～11月21日(日)
企画：長谷部康寛、
やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
出展作家：大泉真帆、長谷部康寛(写真家)
来場者数：176名



今回、大泉真帆さんと2人展をした事によって作家としてのフラットな関係性を今まで以上に
つくれたし、沢山の方に真帆さんの魅力や視覚について考え、感じてもらえたと思っています。

真帆さんの作品と向き合い、共同制作をしたことで、自分の個性を発見する事、それを伸ばしていく事の重要性や、それに伴う喜びを痛感する機会となりました。

そこには障害の有無はなく、心地良い関係性を築ける事に繋がりました。

長谷部 康寛(写真家)

【公募展】「第5回やまがた障がい児者アート公募展
ART DIGる〜べ」

山形県知的障害児者生活サポート協会主催で毎年開催されており、今年度で5回目になる公募展。

会期：2022年1月5日(水)～2月27日(日)
来場者数：288名
応募総数：110名 出展者数：35名



【外部会場での展覧会】「きざしとまなざし 特別展 遊学館」

「きざしとまなざし 2021」の特別展示を山形県立図書館にて開催。

会期：2022年1月5日(水)～2月27日(日)
会場：山形県生涯学習センター 遊学館(山形県立図書館併設)



【企画展】「宮城山形交流事業
みやぎ・やまがたニューカマー展」

県知事連盟事業で4回目の交流展。

宮城県支援センターと連携し、注目の作家を紹介。

会期：2022年3月22日(火)～4月28日(木)
来場者数：41名(3月31日現在) 出展者数：7名



[企画展] 長濱 哲哉 個展「じゃじゃーん!!!! てっちんの世界」

10歳の頃、お絵かきボードに「チョコアイスが食べたい」と描いて自分の気持ちが通じたことからよく絵を描くようになった長濱哲哉さん。中学生の頃からは自分の願望を描くようになり、最近では絵を描くことが自分の気持ちを伝えるコミュニケーションツールの一つになっているそうです。そんな哲哉さんがこれまでに毎日描いてきた絵の展示と合わせて、姉の志穂さんの言葉や写真も展示。さらに母親の奈穂子さんが来場者に対して制作の背景や作品から生まれた人のつながりについても直に話して伝えるなど、哲哉さんの作品を通じて家族の関係性が浮かび上がる、和やかな展示となりました。

会期：2021年11月29日(月)～12月24日(金)
来場者数：504名



[哲哉さんのお母さん・奈穂子さんからのコメント]

展示において工夫したこと

個展の準備をするにあたって、家にためてあった作品を提出したのですが、そもそもこれだけ手元にあったのも、哲哉が中学1年生の時の絵を見てら・ら・らのスタッフさんが「とても魅力的だ〜!」と声をかけてくださったことから絵を保管してきていたんです。それが今回の個展という奇跡に繋がって、感謝の気持ちでいっぱいです。

展示では、「初めまして」の方々にもいつもの哲哉の明るさ、独特な絵の表現を深く知ってもらえたらいいなと、展示や説明の工夫をしました。初期の作品から並べて頂いたり、家での様子がわかるようにお気に入りスポットを再現したり、絵を通して社会とのやりとりのコーナーになればいいなと、哲哉の絵はパッと見てわかりやすいほうですが、「実は…」と裏話をする事で、「そんなことを感じたり考えたりしているんだ〜」と笑ってもらえたり、姉の場には哲哉という存在を身近に感じてもらえるような、そんな手助けになればと、なるべく個展会場に顔を出していました。「1回観に来ただけど、説明つきで絵を観るともっとおもしろいね〜」と声をかけてもらったことは、本当に嬉しかったです。また、展示会場に設けた感想コーナーも、最初はノートを書くことだけで考えていましたが、付箋に書いて貼り付けてもらうかたちにすることで、哲哉だけでなく、観に来てくれた方々も興味を持って読んだり書いたりしてくれて、付箋の花が咲いた様で、これもひとつのアートに見えました。

展示期間中の驚かされた出来事

個展と聞いてもピンときていない哲哉でしたが、どうやら自分の絵が飾られてみんなに観てもらえることは嬉しいようで、展示期間中は学校が終わるとほぼ毎日ら・ら・らに立ち寄り、大きな声で挨拶し、入口のガラスにも絵を描き足して、来場者の感想を見たり、その姿には責任感すら感じられました。

土日は、ほぼ1日ライブペインティングをするということもやってくれました。当初は短時間しかムリなのではと思っていましたが、たくさんの方々に囲まれても大きな声を出さず、イヤホンを使用したりしながら、もくもくと描き、来場された方々の見送りまで!!こんなに社会性があったのか?!と驚かされた次第でした。また、車椅子のお友達も来た時も、自ら迎えに行き、絵を描いている場所へ、話しかけたり、車椅子を押して作品を見せて回ったり、その自然でスムーズな対応に、「いつの間にかこんなに思いやりのある子に〜!」と、とても感動しました。親の私が「きっとムリ」「これは出来ないだろう」と決めつけていたことを、恥ずかしいとすら思った出来事でした。

「最終日だよ」と伝えると…

小さい頃には、いろいろな場面で見られ、親子で辛い体験もしました。そんな哲哉が家族連れの前で好きな絵を描き、小さい子の目はキラキラ! 大人の方々も「すごいね〜」と興味津々で見ている…。その空間がほわ〜んと笑顔に包まれてとても不思議な個展でしたし、こうしたあたたかいまなざしが哲哉にとってプラスに繋がるものだと実感した1カ月となりました。

「最終日だよ」と哲哉に知らせた時も、本人はピンと来ていなかったようなのですが、次の日に、「最終回なの?」と大好きな大河ドラマに例えて個展が終わったことを理解したらしなかったのが、彼らしいなと思いました。マイペースな哲哉は相変わらず学校の休み時間に好きな絵を描き、私に何かを伝えてきます。これからもいろんなことに関心を持って描いていくのかな?

[哲哉さんのお姉さん・志穂さんからのコメント]

今回、展示を通して今までを振り返るいい機会になりましたし、個展には私の友人、職場の方々も来てくれたりして、改めて私は恵まれてるんだなあと感謝の気持ちでいっぱいでした。こんな姉弟もいるんだよと、まずは知ってもらい、それがきっかけで自閉症やその他の障がいにも今までと違った見方をしていたら嬉しいです。

個展だけでなく、新聞、テレビ、雑誌と色々な形で取り上げてくださり、「すごいね〜」「楽しかったよ〜」などと声をかけてもらい、なんだか誇らしげな哲哉を見られて私も嬉しかったです。でも哲哉は個展後も本当にマイペースで、今までと変わらずの距離感で「志穂ちゃんおかえり〜」と出迎えてくれます。

もし哲哉がいなかったら、今の私より視野が広い考え方は出来なかったと思います。小さい頃から哲哉とのやりとりで相手の立場になって考えようとする力は本当に私の強みになりました。保育士になり、親から離れて初めての集団生活をする子ども達と接していく中でも、とても役に立っています。子ども達一人ひとりと向き合ってどんな関わり方をすれば成長につながるか、余裕を持って見守ることの大切さも、哲哉を通して勉強になったことの一つです。これからもその気持ちを忘れずに向き合っていきたいです。

御礼とあしがき

前年度に続き継続して、福祉と芸術分野の人材が協働できる仕組みづくりや、異分野同士が互いを理解し合いながら実践を進められるようサポートし、県内のネットワーク化と連携強化を図るよう活動を進めてきました。出展者、参加者、関係者のみなさんと試行錯誤した一年、本当にありがとうございました。みなさまのお陰で、公募展や県内各地の展覧会をきっかけに温かいプラットフォームができ始めていると思います。2021年度からは、展覧会だけではなく表現の発信（身体表現や作品の二次使用等）にアプローチしていく実践も行いました。感染症対策に気を付けながらの企画で、圏域をまたいでの活動が難しかったのですが、身体表現の事業で関わっていただいた砂連尾理さんの言葉に発想を変えるきっかけをもらいました。砂連尾さんがダンスワークショップを行う高齢者施設では、コロナ禍で対面ではなくオンラインでの実施になり、一緒に空間に入れないデメリットはあるのですが、その分、施設の職員が積極的に動いてくれるようになったというメリットがあることを教えてくれました。たくさん利用者さんと一緒に活動するときには、支援する職員と連携して同じ空間を作ることがとても大切になります。そこで、山形の企画では、県外から参加の砂連尾理さんにはオンラインでファシリテートしてもらい、現地の人材が福祉の現場に出向いて対面でワークショップをすることで、現地の人材の育成に繋げる事業にしました。できないことだけに目を向けて嘆くのではなく、目的さえしっかりもっていれば、困難な現状の中から全部ひっくるめて、可能性を見つけていくことができるのかもしれないと思いました。そう考えていくと、いろいろなことの可能性が広がります。課題に対して努力して克服するだけでなく、その状況を受け入れ活かしながら解決することができるかもしれない、今回の取り組みで強く感じました。

武田 和恵（やまがたアートサポートセンターら・ら・ら コーディネーター）

